カナダの対米関係にみる協力と独自性

ジェラルド・ライト

カナダの初代外務大臣ルイ・サンローランは、かつて、「われわれ（カナダと米国）は、共通の境界線で区切られた土地を有する農民と同じように、〝政策〟という言葉によってその過程にもったいをつけることなく、双方の間に生じる問題は日常的に処理するものと考えている」と述べた。カナダでは、このように、これまで対米関係をいく分あいまいにして、その数々の重復した諸要素を政策目標の総括的声明という形にまとめる、ということはしなかったのが通例である。

同時に、カナダ政府の閣僚・高官は、わが南の隣邦との関係にきわめて終始一貫した姿勢をとってきた。彼らの基本的な対米態度や戦術は、何年間もあまり変わってないのである。政策を決定する人々は、米国政府と協力する傾向を強く示す一方で、二国間の正式なかかわり合いを避けようとしてきた。協力を望みながら、それが親密な関係に発展しないよう、自制に努めてきたのである。

この奇妙に相反した感情が並存する姿勢は、私の考えでは、英国という、カナダがかつて衛星国であったもう一つの大国との経験に根ざしている。

協力への衝動

十九世紀のカナダは〝辺境〟社会であった。その主要産物経済（スタープルエコノミー）（異なった時期に、毛皮、林産物、非鉄金属などの主要産物を中心とした経済）は都市の市場と工業製品に依存し、その軍事保障は英国の海軍力が提供し、そしてその政治的将来は、大方、国外でのできごとによって左右されていた。さらに、カナダの文化は、大部分、ヨーロッパとのきずなの上に成り立っていた。つまりカナダは自分より強力な国と連携してはじめて、何らかの重要性をもちえたのである。

というわけで、カナダにおける初期の二つのナショナリズム運動、すなわち英国系カナダにおける〝カナダ第一運動〟とケベックにおけるオノレ・メルシエのパルティ・ナショナル運動は、いずれも英国との絆を切る、すなわち敢然たる独立へ向かうまでには至らなかった。独立すれば、アメリカに吸収されるほかないと信じられていた。ところが、そのアメリカの無秩序な機関や共和国的価値観に何らかの有用性を認めるカナダ人はあまりいなかったのである。

もしカナダが一番身近な大国に比べて弱いということが運命づけられているとしたら、この状況を最大限に利用するにはどうしたらいいだろうか。十九世紀末にカナダ帝国主義運動を指導した人たちは、その答えとして、英国との協力的同盟を唱えた。彼らはカナダがその植民地としての地位を捨て、徐々に一人前に成長するのを妨げようとしたとして、厳しく非難されることが多いが、トロント大学のカール・バージャー教授が主張するように、彼らが英国との親密な関係を望んだのは、国際問題におけるカナダの責任と地位を引上げるためであった。大英帝国のうしろ立てがあれば、保護と広い活動の舞台が期待できる。その広い舞台なら、カナダ単独でやるよりもっと野心的なことができるはずだ。つまり、英国との協力は、カナダの壮大な国家目標を実現する手段というわけであった。

二〇世紀に入って、英国から正式に憲法上の独立を達成した政治思想家や政治家の頭の中にも、こうした〝帝国主義派〟の考え方は生きていた。より大きな共同体の中で行動し、その共同体に創造的に適応することの必要性は、彼らがもっていたカナダの自立に対する考えの中核をなしていたのである。

カナダの外交政策に関するパイオニア的学者の一人であるローリング・クリスティは、かつて次のように書いている。

独立？この言葉は、前代のしろ物であって、すでにわれわれの耳には奇異にひびく。現代の政治用語辞典では、巻末付録の廃語あるいは古語集に属する。今の世界には、このようなものなど存在しない。〝相互依存〟〝協力〟——こういうものこそ、新しい必要性を反映するイメージである。

それだけでなく、大英帝国あるいは他の国々との協力は、重要な決定におけるカナダの関与を強化し、国際問題におけるカナダの実効性に貢献する。多くの知識人が特に（英）連邦を賞賛したのも、それが継続的協力の枠内における国家主権の実現を認めたからであった。

二国間関係への拒否反応

カナダの対外姿勢のもう一つの面、すなわち強大な同盟国との二国間関係にあまりのめり込まない、という考え方も、英国との長い父子のような関係にその端を発している。カナダは、発足してのちも、その対外関係に関する法的あるいは実際的権限をもたなかった。

しかし、一九〇三年に、英国の対米友好維持政策がカナダの利害に優先する形でカナダ・アラスカ境界問題が解決されるなど、カナダ人の感情は逆なでされた。加えて、母国の対外戦争に巻き込まれる可能性もあって、イギリスにカナダに代わって決定を下す能力があるかどうかという疑いが強くでてきた。

強大国にあまりのめり込んではいけないと口をすっぱくして言っていたのは、カナダ帝国主義派に反対する人たちである。新聞編集者のジョン・W・ダフォー、フランス系カナダ人のナショナリスト・アンリ・ブラッサ、初代外務次官のO・D・スケルトンといったカナダの自立を支持する人びとは、（旧英）連邦諸国間のいかなる政治的協調論にも強く反対した。